

# FLORA KANAGAWA

## AUG. 1. 1981

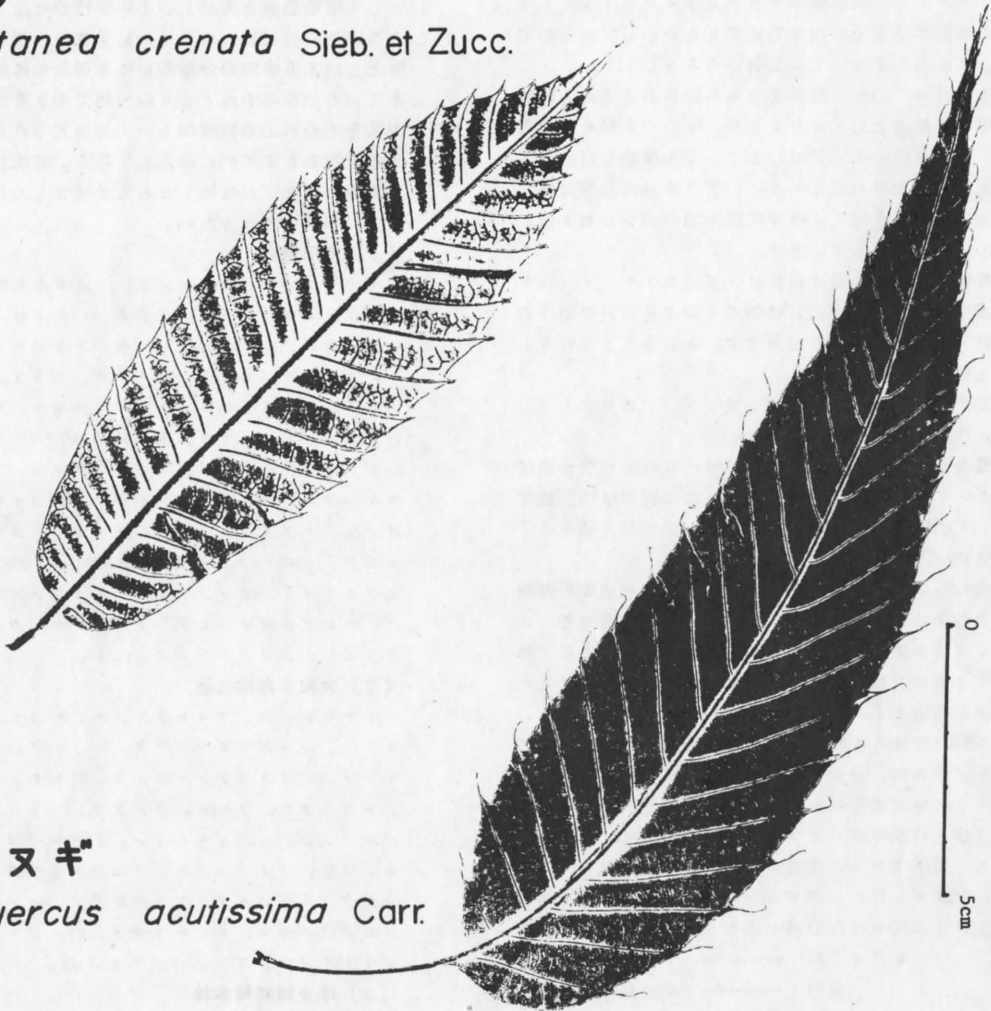
## No. 8

神奈川県植物誌調査会ニュース 第8号

231 横浜市中区南仲通り5-60 神奈川県立博物館内  
神奈川県植物誌調査会(振替口座 横浜 10195)  
TEL 045-201-0926

### クリ

*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.



### クヌギ

*Quercus acutissima* Carr.

#### クリとクヌギ

この兩種は果実を見る限り見間違えることはありませんが、その葉はまことによく似ています。ここにはあまり上出来ではない葉の拓本を掲げましたが、区別の要点は葉縁の鋸歯の先の尖り具合、葉の巾の最も広い所が葉の中部あたり(クリ)か、下半部(クヌギ)か、などでしょう。クリの樹皮は割れ目が少なく銀灰

色を帯びていますが、クヌギは大小の割れ目が多く全体に濃褐色です。クリとクヌギは全く別属で葉形の類似は他人の空似ですが、このような空似関係はヤマブキショウマとアカショウマ、サラシナショウマとルイヨウショウマ、サワシバとヤマシバカエデなど多くの例があります。(大場達之)

## ハンゲについて

和名カラスビシャクの漢名を「半夏」といいます。ただ漢字で書けばなんでも漢名というわけではなく「藊」「榎」などは日本製の字・すなわち国字です。

さて夏至から数えて11日目を「半夏生」と呼びます。それは半夏が生える頃とも言われていますが、その「半夏生」について今年はこのことがあったので報告致します。

7月2日が「半夏生」なのでいくつかの新聞は次のように報じていました。(原文のまま)

- ①ドクダミと同じ仲間の半夏という毒草が……………
- ②ドクダミと同属の薬草カラスビシャクが……………

この記事は全く植物学的に誤りをおかしているのです。このことについて少し書いてみましょう。

筆者はいくつかの野草会をもち会員の皆さんと野外で植物の勉強をしておりますが、植物の名前を教える時、中級程度の人達には、どうしても植物の科の順序の説明をしなければならず、どうやったら楽に覚えてもらえるかと考え、奥津式科別順列法をひねり出したように説明しています。

植物の名前を勉強するには、英語のアルファベットの順序を覚えるように、植物でもおよその科の順序の並び方を覚えることが必要です。と言うことを自覚してもらいます。

英語なら、まんなかがL・M・N・でありBとYとは、はなれた位置にあります。

植物の科の順序は、世界中で統一された自然分類法のエングラー式になっていて、どこの国の植物図鑑でもシダ植物から裸子植物・離弁花・合弁花と続き単子葉植物へと並んでいます。

それらの科のつながりを覚える時、北海道から沖縄までの間にある県や市町村の名前に科の順番を並べていく方法が奥津式なのです。くわしい説明はここでは長くなるのではぶきますが、要点だけを書きますと北海道の根室をトクサ科とし、稚内をドクダミ科とし、日本列島のまんなかをモクセイ科として、関西地方にユキノシタ科、バラ科、マメ科を当てキク科は北九州、サトイモ科を鹿児島としてラン科を沖縄にして考えると並び方の順序が、皆さんによく理解してもらえます。

この順序で言うと英語ならBとYがはなれているようにドクダミ科のドクダミと、サトイモ科のカラスビシャクとの関係は次の通りになります。

ドクダミ科 ←→ サトイモ科  
稚内 ←→ 鹿児島

このように、はなれた位置関係にあるのに、「ドクダミと同属の…」と決めたり、又1社が薬草でもう1社が毒草であったり新聞社は植物の記事に関しては、全く無知の文が多く編集長の顔が、みたくなります。

そして新聞社へは、正しい文を送ったのですが全くナンにつぶてでした。(注・このコピーは、植物誌調査会へ送っております)

このことはほんの1例であって雑誌などには、ひどいのが多くあります。そのひとつはユリ科のクワンソウ

ウ(古い人とお思いでしょうが筆者は、こう教わりました。漢名は萱草。)と日本に産しないマメ科のカンゾウ(甘草)で、いつもごっちゃにされて間違われています。私達の希望としては、植物の記事に関しては正確を期してほしいと願っております。

奥津均(薬剤師)

追記 半夏は薬用植物なので農家のおばあさんが、ヒマをみつければその球茎を掘り漢薬問屋へ売っては、お金をためたので別名「ヘソクリ」と呼びます。

## 大和市の植物寸見

大和市では市の教育研究所がS54・55両年度の仕事として植物調査を実施し、小中学校の教諭5名及び筆者等がその任に当たった。その結果都市近郊では今や稀種ともいえる植物の分布がかなり明らかになったと考えている。標高90mどまりの平地でありながら、境川流域を中心に山地性植物もいくつか見られた。以下若干の植物名を順不同に羅列してみる。詳細は「郷土学習資料・大和市の植物」なる冊子にまとめられているのでご参照いただきたい。

### 〔1〕境川流域

イチリンソウ、ニリンソウ、キクザキイチリンソウ、ヤマブキノソウ、ヤマエンゴサク、ジロボウエンゴサク、ユリワサビ、ヒカゲスミレ、セントウソウ、ハナウド、レンブクソウ、ヤマネコノメソウ、キツリフネ、アワブキ、コウモリカズラ、ナガバヤブマオ、ゴマギ、カントウタンポポ、トウカイタンポポ、ハグロソウ、ハンゲショウ、サイカチ、ウワミズザクラ、アゼナルコスゲ、ワダソウ、ヤマホトトギス、ガガイモ、オドリコソウ、オカタツナミソウ、ツルカノコソウ、ヤブミョウガ、イヌゴマ、カントウマムシグサ、ウラシマソウ、キツネノカミソリ、アブラチャン、リョウメンシダ、ホシダ、ヘビノネゴザ、ヒメワラビ、シケシダ、オオハナワラビ、ナツノハナワラビetc.

### 〔2〕大和水源地付近

イチリンソウ、ヤマトリカブト、イカリソウ、キヌタソウ、ジロボウエンゴサク、ルリソウ、ギンラン、キンラン、オオバントンボソウ、エビネ、シュンラン、クマガイソウ、アマナ、リンドウ、ツリガネニンジン、ツルニンジン、ニョイスミレ、ケマルバスミレ、フジカンゾウ、アブラナスキ、リュウノウギク、アワコガネグク、ユウガギク、ヤマシロギク、ナンバンギセル、ツルフジバカマ、タンキリマメ、ハンノキ、イワガネソウ、イノデ、フユノハナワラビetc.

### 〔3〕中央林間雑木林

ニガキ、ホタルカズラ、ツタウルシ、クマノミズキ、ハナイカダ、ムラサキシキブ、ハバヤマボクチ、ノハラアザミ、ホタルサイコ、コマユミ、ヒトリシズカ、フタリシズカ、ササバギンラン、メヤブマオ、ノブキ、サジガクソウ、コヤブタバコ、キジムシロ、フデリンドウ、コシオガマ、ナンテンハギ、マキエハギ、コゴメウツギ、ミゾシダ、ヘビノネゴザetc.

### 〔4〕下福田の水田と休耕田

オモダカ、コナギ、アブノメ、イボクサ、イヌホタ

ルイ、タマガヤツリ、アオガヤツリ、コアセガヤツリ、ヒナガヤツリ、ヒメクグ、テンツキ、ヒデリコ、ムラサキサギゴケ、ヤブツルアズキ、カントウヨメナ etc.

#### [5] 帰化植物

アメリカフウロ、アメリカネナシカズラ、オオブタクサ、アレチウリ、ベニバナボロギク、ダントボロギク、シロバナセンダングサ、コセンダングサ、コエンドロ、カキネガラシ、コマツヨイグサ、カナリークサヨシ、オオアワガエリ、ドクムギ、ネズミムギ、イヌムギ、セイタカアワダチソウ、オオアワダチソウ、ブタナ etc.

大和市は都市化の進行が著しく、二次林や植栽林が急速に減少しており、上記[1]から[4]の植物たちも生存の危機にさらされている。そこでフロラ調査の成果を土台として自然保護運動の盛り上げが焦眉の急であるように思われる。

平松義尚・齋藤慎一郎

### 秦野地区から

私の受け持っている調査地域はHAT-4です。ここは丹沢を含む広い地域で種類数もかなり多いのではないかと思います。そこで調査採集はまず足元からと私の勤務校である上小学校の敷地内を調べてみました。校庭の隅の手の行き届かない所、周囲の畑地との土手、さらに教材園などに小さな植物達が生きついています。上小学校は、丹沢山地の山すそにあるわずか7学級の小さな学校です。こうした里山の学校に生えている植物達は、街の中にある大きな学校とは、またちがった様子がみられるかも知れません。ここに上小学校の一年間を通してみられた植物を紹介してみたい。

スギナ、イヌワラビ、ゲジゲジシダ、トラノオシダ、ヤブソテツ、ヤマイトチシダ、ホシダ、コウヤワラビ、ノキシノブ、カニクサ、エノコログサ、アブラススキ、メヒシバ、オヒシバ、アシボソ、チゴザサ、ススキ、アズマネザサ、キンエノコロ、ヌカキビ、ヌカボ、カゼクサ、チカラシバ、アキメヒシバ、ナルコビエ、ジュズダマ、スズメノカタビラ、カニツリグサ、カモジグサ、ネズミノオ、スズメノヤリ、コブナグサ、ハリイ、カヤツリグサ、カンスゲ、ヒメクグ、ヤブラン、シャノヒゲ、ヒガンバナ、ノビル、ツユクサ、カラスビシャク、イヌタデ、コマツナギ、イノコズチ、ミツバツチグリ、ゲンノショウコ、アオミズ、ヤブハギ、ヤハズソウ、キツネノマゴ、カタバミ、クワクサ、セリ、シソ、イタドリ、ヌスビトハギ、トキワハゼ、ツメクサ、イヌガラシ、オヘビイチゴ、オオバコ、コミカンソウ、オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリ、コニシキソウ、エノキグサ、ホナガイヌビユ、ヒメムカシヨモギ、キツネノマゴ、クサノオウ、コナスビ、トキンソウ、ザクロソウ、ドクダミ、オランダミミナグサ、スズメノトウガラシ、コタネツケバナ、アカネ、ヨツバムグラ、ノチドメ、スズメノエンドウ、カラスノエンドウ、カキドウシ、キツネノボタン、クサノオウ、ハコベ、ノミノフスマ、コヒルガオ、ヒルガオ、ヤハズソウ、シロツメクサ、イヌコウジュ、スイバ、

ギシギシ、マツヨイグサ、カテンソウ、ジロボウエンゴサク、ムラサキケマン、ノダケ、タケニグサ、ミスヒキ、ホトケノザ、ヒメジソ、カラムシ、アカソ、シロザ、スマレ、タチツボスミレ、コモチマンネングサ、センニンソウ、セイタカアワダチソウ、シオン、オオアレチノギク、ヨモギ、ククイモ、ヒメジョオン、ハルジオン、チチコグサ、フキ、ハキダメギク、ヤブタバコ、ジシバリ、ハルノメゲシ、タカサブロウ、カントウタンポポ、セイヨウタンポポ、ノボロギク、チチコグサモドキ、ノハラアザミ、ノアザミ、コウゾリナ、ヤマノイモ、トコロ、ヤブガラシ、カナムグラ、エビツル、ノブドウ、ヘクソカズラ、スイカズラ、ヤブマメ、アケビ、ミツバアケビ、ノイバラ、クワ、ツルウメモドキ、クサギ、ウツギ、ヤマブキ。

どこにでも見られる草木ですが、この狭い限られた場所で149種の植物が見られました。ずいぶん多いものです。身近な植物の調査が、神奈川植物フロラ作成に少しでも役立てばと思います。

(佐々木 あや子)

### 横浜北・川崎地区から

今年の3月、採集標本目録を県博物館のご助力により印刷していただきましたが、いかがだったでしょうか。ご質問、標本再検討のためのご来校を歓迎致します。昨年、一昨年に較べれば時間的にゆとりのある春を迎えて採集も同定もはかどりました。

次のものを取消し、訂正、補足、追加させていただきます。

○取消し ヤシヤセンマイ、タチカモジグサ、ウスベニツメクサ。

○訂正 アリノトウグサ科→ウコギ科 オオカワジシヤ→カワジシヤ コモチナデシコ→イヌコモチナデシコ

○補足 カモジグサは全地域、カラスノチャヒキ一編

○追加 地域内ではじめて採集したものだけです。

ヒメノキシノブ、ヌリワラビ、ヒロハハナヤスリ、ヒルムシロ、シバムギ、ムクゲチャヒキ、*Bromus* sp-1, *Bromus* sp-2, ミナトムギクサ、ミズタカモジ、*Festuca vivipara*, *Eragrostis* sp-1~2, ミノボロモドキ、ハイコヌカグサ、セイヨウヌカボ (*Apera spica-wenti*), モエギスゲ、オオイトスゲ、ミヤマシラスゲ、シラコスゲ、ヒメシラスゲ、ミコシガヤ、ヤブスゲ、ピロウドスゲ、エナシヒゴクサ、ヒメゴウソ、タカネマスキサ、シオクグ、ハナビゼキショウ、ノハナショウブ、シラン、サイハイラン、アサ、*Amaranthus* sp., トゲミゲシ、ミヤガラシ、シロガラシ、カラクサナズナ、*Capsella rubella*、ハタザオガラシ、ヒメアマナズナ、レンリソウ、アマ、C-58アワゴケ科、ミズハコベ、ヒシ、ホタルサイコ、コエンドロ、ナンバンルリソウ (*Heliotropium indicum*)、D-19クマツツラ科 (アレチハナガサ、クサギ、ヒメビジョザクラ、ムラサキシキブ、*Verbena* sp.) シロバナサギゴケ、ツルニンジン、*Campanula rotundifolia*、キキョウソウ、*Gnaph-*

*lium* sp.-1~2, マメカミツレ, カミツレモドキ, ハルシャギク, ホソバナチチコグサモドキ,

sp. と書いてあるのは、現在のところどうにもならない植物です。そのうちいくつかは科学博物館で調べればわかるかも知れません。

*Amaranthus* sp. は柱頭が3です。花被片が3ならばヒユですが、5であるためにsp. としました。

*Gnaphalium* sp.-1~2, 以前2のほりを科博で調べましたが結論は出ませんでした。高さ20~50cm根生葉は後まで残り、へら形、黄緑色、上面無毛、下面綿毛、花序は長く伸びて、チチコグサモドキ型、冠毛の基部は輪状、総苞片は乾膜質。

いままでも三区にわたって見られた *Bromus* sp.-1 は一見イヌムギです。しかし、やや多毛で、葯と花糸がそれぞれ7mm長、イヌムギの10倍もある点が大きく違っています。開花時には花外に葯が垂れ下ります。

その他にも不明種を持っています。私は学名不詳のままでも、特徴をしっかりと記録した上で登録すべきであると考えております。ひょっとすると、県内だけでなく、日本各地に学名不詳氏が安定した生活を送っているかもしれませんから。

神奈川県出田町で採り、ニューヨーク市立大の小山鉄夫氏に *Cyperus loetus* と同定していただき、私が *loetus* というラテン語の意味からコガネガヤツリと名付けたものは、いまでは鶴見区の大黒町と、埋め立てられたばかりの大黒埠頭にも姿が見られるようになりました。南米原産のこの帰化植物は科学博物館に文献も標本もなかったものです。もし、小山氏に学名を教えていただかなかつたら私はこれを *Cyperus* sp.-1 と今も呼んでいると思います。全世界から植物の集まる横浜ではこのような体制を作っていくことが必要ではないでしょうか。お手元に学名不詳の植物がございました是非見せていただきたいもの、と思っております。

(鶴見高校 森 茂 弥)

## 横浜南ブロックから

(MIN) 南区永田の2本のジャヤナギを見に行っただけで奥の谷間に入った。水溜りがあり何かないかと探したら軟弱なスグがあって、すぐシラコスグと分りましたが、すでに絶えたと考えていたのでよくここに生きていたものと感激いたしました。隣りにもスグがあり、これはミヤマツラスグでした。

これから六ツ川の宅造地へ行き帰化植物を調査しました。フシネハナカタバミ、シロバナマンテマ、カキネガラシ、ハナヤエムグラ、オオツメクサなどを見て標本にし、コガンビを見た下の谷へ行きますと、丁度ゴウソンの穂が垂れていてこれも標本としました。よい調査地がない南区内では8~9ヶ所を重点的に歩く予定です。(MAY., 30, 1981)

(HO) 相鉄線西谷駅を下車して帷子川の方へ下って橋を渡ると保土ヶ谷区川島町です。このあたりは昔からカザグルマの産地で有名ですが、この山の斜面には清い流れがあって、スグ属植物が何種もありこの調

査をしたので次に列挙いたします。

マスクサ、ゴウソ、カサスグ、コジュズスグ、ジュズスグ、ヤマアゼスグ、シラコスグ、ホンモンジスグ。  
(Jun., 6, 1981) (長谷川 義人)

## 保土ヶ谷区西谷帷子川付近の植物

保土ヶ谷区は、女性二人で調査しており、歩く場所も限られているため、思うにまかせない現状です。

最近都市化が急速に進み、日一日と姿を消すつあり、西谷駅周辺もその例外ではありません。帷子川の流れ沿いを、現在までに集めた標本は150種、200点位です。

次に主なものを上げてみますと、

シュラン、エビネ、キンラン、ギンラン、トンボソウ、オノノヤガラ、タニギキョウ、シロボウエンゴサク、ヨゴレネコノメソウ、マルバコンロンソウ、イチリンソウ、ニリンソウ、ニシキゴロモ、イカリソウ、オオバタネツケバナ、タツナミソウ、アカネスマレ、ケマルバスミレ、イチヤクソウ、ミゾコウジュ、アカショウマ、カザグルマ、ハンクショウ、シュロソウ、カシワバハグマ、クラマゴケ、ノキシノブ、ウラジロ、クサソテツ、ベニシダ、コモチシダ、アイアスカイノデ、等々。なかでもアカショウマがニリンソウやエビネ、イカリソウと共に群生していたのには驚かされた。

最近の帷子川は、護岸工事が進み、併せて、自動車の通れる道路が出来た為か、二年前に調査を始めた頃にあったウラジロ、また群生していたイカリソウも、そのほとんどが掘りとられ、アイアスカイノデは沢がにを取りに来る子供達にふみ荒されて、無残な姿を晒していました。この地区は、保土ヶ谷でも野草の宝庫と言われていましたが、押し寄せる都市化の波には勝てず、その貴重なものが次第に姿を消していくのが残念でなりません。

保土ヶ谷 吉川 アサ子

## 第2回合同調査会記録(三浦地区)

1981.5.31

調査地は、逗子市と葉山町にまたがる二子山(209m)で、県博の高橋・大場両先生が指導にこられたし、地元の横須賀植物会の細心の配慮のもと、誠に実効のあった調査研究が出来た。

観察・調査した植物の記録は石渡治一さんが記録されたものです。キヨスミギボウシは高橋先生が葉柄の特長を話され、間瀬さんがツルハコベを指摘されたのはよく足もとまで観察の眼を光らせなくては行けない。タニギキョウも見逃すところだった。二子山はシダ植物の豊富な山である。西山さんのこれまでのシダ研究の苦心談を話されたり、大場先生の地質時代からの植物についての話、調査会での講座は好評である。

帰り道に間瀬さんがヤマタバコ自生地を案内してくれたのもこの日の収穫であった。



### 羊歯植物

- ハナヤスリ科 オオハナワラビ。  
 カニクサ科 カニクサ。  
 ワラビ科 フモトシダ、ハコネシダ、イワガネゼンマイ、イワガネソウ、ワラビ、オオバノイノモトソウ、マツザカシダ(大場氏確認)、クジャクシダ、イノモトソウ、ホラシノブ。  
 オシダ科 ホシダ、オニヤブソテツ、ベニシダ、オクマワラビ、イタチシダ、クマワラビ、ミゾシダ、ゲジゲジシダ、イノデ、アスカイノデ、ミウライノデ、ジュウモンシダ、リョウメンシダ。  
 シシガシラ科 コモチシダ。  
 チャゼンシダ科 トラノオシダ。  
 ウラボシ科 ミツデウラボシ、マメヅタ、ノキンノブ。

### 裸子植物

- イヌガヤ科 イヌガヤ。  
 スギ科 スギ(栽)。  
 ヒノキ科 ヒノキ(栽)。

### 双子葉植物(離弁花類)

- ヤナギ科 シバヤナギ。  
 カバノキ科 オオバヤシヤブシ。  
 ニレ科 ムクノキ。  
 イラクサ科 コアカソ、ミズ。  
 ナデシコ科 ツルハコベ。  
 キンボウゲ科 オオバショウマ、イヌショウマ。  
 ツツラフジ科 オオツツラフジ。  
 クスノキ科 アブラチャン。  
 アブラナ科 ハタザオ。  
 ユキノシタ科 タマアジサイ、ウツギ、ヒメウツギ、アカショウマ、ムカゴネコノメソウ、ヨゴレコノメソウ、ネコノメソウ、ハナネコノメソウ。  
 バラ科 モミジイチゴ、クサイイチゴ、カジイチゴ、ヤマテリハノイバラ、イヌザクラ。  
 マメ科 マルバノヌスビトハギ。  
 カタバミ科 エゾタチカタバミ。  
 ニガキ科 ニガキ。  
 トウダイグサ科 シラキ。  
 ツリフネソウ科 ツリフネソウ。  
 クロウメモドキ科 ケンボナシ。  
 マタタビ科 サルナシ、ウラジロマタタビ。  
 スミレ科 ツボスミレ(ニョイスミレ)  
 ウコギ科 ウコギ、ヤマウコギ。  
 ミズキ科 ハナイカダ。

### 〔合弁花類〕

- サクランソウ コナスビ、ミヤマタゴボウ。  
 フジウツギ科 ホウライカズラ ?  
 クマツヅラ科 サンジャクパーベナ ?  
 シソ科 ニガクサ  
 オミナエシ科 ツルカノコソウ  
 キク科 タイアザミ、アズマヤマアザミ、キツネアザミ、ムラサキニガナ。

### 単子葉植物

- イネ科 ヌカボ、カニツリグサ、ドジョウツナギ、オオイチゴツナギ、スズメノチャヒキ。

カヤツリグサ科 シラスゲ、ヒメカンスゲ、ケスゲ、マスクサ、ジュズスゲ、ヤワラスゲ。

ユリ科 イワギボウシ、キヨシミギボウシ。

(鈴木一喜)

### 横浜南ブロック野外研修会

#### 三保市民の森附近調査報告

実施日 56年6月6日(土)PM2:00~

指導者 大場先生、高橋先生

参加者 長谷川義人、林辰雄、伊藤斐子、吉川アサ子氏他

#### 観察採集した主なる植物名

しだ植物 アスカイノデ、アイアスカイノデ、イタチシダ、イヌガンソク、イヌシダ、イヌワラビ、イノデ、イワガネソウ、オオイタチシダ、オオハナワラビ、オオバノイノモトソウ、オオベニシダ、オオレンシダ、オクマワラビ、クマワラビ、ゲジゲジシダ、コウヤワラビ、シケンシダ、スギナ、セイタカシケンシダ、ゼンマイ、トウゲシバ、ナガボノナツノハナワラビ、ナツノハナワラビ、ナライシダ、ニシケンシダ、ハシゴシダ、ハリガネワラビ、ヒメシダ、ヒメワラビ、フモトシダ、ヘビノネゴザ、ベニシダ、ホウライシダ、ホシダ、ホソバシケンシダ、ミウライノデ、ミサキカグマ、ミゾシダ、ミドリヒメワラビ、ヤマイヌワラビ、ヤマヤブソテツ、ワラビ。

まつ科 クロマツ。

すぎ科 スギ。

ひのき科 サワラ。

B10 いね科 ○おむぎ属 カモジグサ、アオカモジグサ。○うしのけぐさ属 オオウシノケグサ、オニウシノケグサ、スズメノカタビラ、ドジョウツナギ、ネズミムギ、ホソムギ。○からすむぎ属 カニツリグサ。○こぬかぐさ属 カズノコグサ、スズメノテッポウ、ヒエガエリ。○きび属 ヤマスズメノヒエ、チジミザサ。○うしくさ属 ススキ、チガヤ。

かやつりぐさ属 ○すげ属 カサスゲ、ヒゴクサ、ヒメカンスゲ、マスクサスゲ、ホソバヒカゲスゲ。

B21 ゆり科 アマドコロ、オオバギボウシ、オオバジャノヒゲ、サルトリイバラ、シオデ、ジャノヒゲ、シュロソウ、ツルボ、ナルコユリ、ヒメヤブラン、ホウチャクソウ、ホトトギス、ミヤマナルコユリ、ヤブラン、ヤマホトトギス、ヤマユリ、ワニグチソウ。

B23 やまのいも科 オニドコロ、キクパドコロ、ヤマノイモ、タチドコロ。

B24 あやめ科 キンショウブ。

B25 しょうが科 ミョウガ。

B27 らん科 エビネ、ギンラン、クマガイソウ、クモキリソウ、ササバギンラン、シュンラン。

C1 どくだみ科 ドクダミ。

C3 せんりょう科 ヒトリシズカ、フタリシズカ。

C7 かばのき科 ハンノキ。

C8 ぶな科 クヌギ、クリ、コナラ、シラカシ。

C9 くれ科 エノキ、ケヤキ、ムクノキ。

C10 くわ科 カナムグラ、コウゾ、ヤマグワ、クワ。

